街の灯り物語

灯り――それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

街の灯り物語

戻ってきた灯りに感じた人の温かさ

SAKURA
シンガー

神戸に育った私にとって、灯りといえば「夜景」。温かい光に包まれた街を眺めては、人々の暮らしに思いを馳せていた。

その光景が一変したのは、十五年前、阪神淡路大震災の時だ。当たり前だった日常は一瞬で崩れた。六甲の自宅はかろうじて無事だったものの、見下ろす神戸の街は灰色の煙に包まれ、ところどころに火も見えた。建物は壊れ、街灯もなく、夜になると街は真っ暗。電気がないと、こんなに暗いのかと実感した。瓦礫に埋もれた街の暗闇は、恐怖だった。

悲惨な状況を目の当たりにして、頭の中は真っ白。記憶は曖昧だが、電気がついたのは意外に早かった気がする。待ちかねていた母は、「ついたわ！」と大喜び。私にはまだ、手放しで喜ぶ余裕はなかった。活動の場を失い、余震におびえる状況は変わらない。

でも、気持ちを奮い立たせてボランティアに参加した。家族を失った人、テントで暮らす人。自分より大変な人は大勢いた。小さなことでも、私にできることをしていこう――そう考えるようになった。歌ううえでも、生活のなかでも、「人の役に立っているか」を優先するようになったのは、このときの経験がきっかけだ。

復興までの道は長かった。六甲から見る夜景に光が戻ってきても、ところどころ真っ暗なままの場所がある。それを辛い気持ちで眺めていた。私の家は高台だから、大阪まで見える。大阪の夜景は、以前と変わらない。光の量が違うのが切なかった。

そんな経験をしているからだろう。「街の灯り」の歌をレコーディングする際、灯りのある風景が次々に現れるCM映像を見た時は、胸がいっぱいになった。それは、ただの美しい街灯りの光景ではなく、私にとっては「戻ってきた灯り」。今もライブの締めくくりには、「街の灯り」をリクエストされることが多い。みんなが温かい気持ちになれる曲に出会えたことを、幸せに思う。

太陽や月の光は、自然が与えてくれるもの。それに対して電気の光は、人の手なくしては私たちのもとに届かない。自然の光が天使からの愛だとすれば、電気の灯りは、人の思いやりがこもったものだ。だからこそ、夜景も街の灯りも、こんなに愛おしく感じるのかもしれない。■

SAKURA　さくら　シンガー
1972年スイス生まれ。大阪、神戸で育ちインターナショナルスクールで学ぶ。シアトル大学留学を経て帰国後、英語教師をしながらライブで経験を重ね、97年メジャーデビュー。06年関西電力CM曲「街の灯り」をカヴァー。神戸を拠点に音楽活動を行っており、2010年1月17日には兵庫県立文化体育館での「震災メモリアルコンサート」にスペシャルゲストとして出演予定（お問い合わせ:同体育館078-631-1701）。
http://www.singer-sakura.com/